

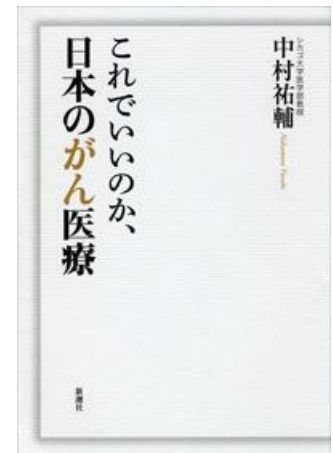
● Dr. 井上林太郎の書籍紹介

これでいいのか、日本のがん医療
中村 祐輔 著
新潮社 2013年2月初版

はじめに

世界的に権威のある科学雑誌「ネイチャー」に、2012年2月、「ゲノム研究のエース、日本に見切りをつける」というタイトルの記事が掲載された。ゲノム研究のエースとは、本書の著者、中村教授である。中村教授が日本を離れる理由について、「内閣官房医療イノベーション推進室長としての自らの無力さ、失望感」、次に、「シカゴ大学に新たに設立された Center for Personalized Therapeutics(個別化医療センター)での新たなチャンスに賭けたいという気持ち」、そして「日本政府からのゲノム科学に対しての不十分な援助に対する不満」があげられていた。

本書を読み終わると、私も、「これでいいのか、日本のがん医療」と感じた。また、グローバルな視点から、多くの日本のがん医療の問題点を教えられた。今回は、その一部を紹介する。なお、先生の近著、「がんワクチン治療革命」(講談社、2012年12月初版)からも引用した。



著者の紹介； 中村祐輔 (なかむらゆうすけ)

1952年生まれ。77年大阪大学医学部卒業。専門は、遺伝学、分子生物学。卒業後、外科医としてがん医療に従事。84年ユタ大学に留学、ゲノム研究を始められた。94年東京大学医科学研究所教授に就任。2011年民主党からの要請で、医療の国家戦略を立案することを目的とした内閣官房参与・内閣官房医療イノベーション推進室長を併任。同年12月同室長を辞任。12年4月より、シカゴ大学医学部教授。現在、分子生物学を駆使し、分子標的薬、がんペプチドワクチン療法等の開発が行われている。

本書の内容・感想

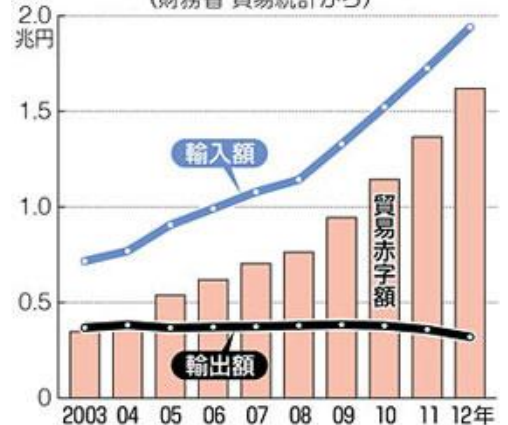
日本発の新薬の開発が必要な理由は、「ドラッグラグの解消だけでは」より抄出。

『ドラッグラグとは、海外で開発、承認されている新薬が、日本では治験や審査に手間取って治療に使えないという時間差のことだ。近年、治験の体制を見直すなどして、この時間差は縮まってきている。確かにそれはそれでいいことだ。しかし、新薬を輸入すればいいというのは、やや短絡的な発想ではないか。

2000年あたりから日本の医薬品の輸入額はどんどん増えてきており、11年の医薬品の総輸入額は、1兆8,000億円、日本が外国に輸出した医薬品の総額を引いた、この分野での赤字は1兆3,600億円。日本の貿易赤字が約2兆5,000億円だから、その50%以上を医薬品が占めている。

日本で新たな薬が次々と研究・開発されるようになれば、がんの治療に常に最先端の新薬を使えるばかりでなく、医薬品の分野にお

医薬品の輸出入額と貿易赤字額の推移 (財務省 貿易統計から)



ける赤字も解消され、逆に日本の新たな輸出品になる。』

山中伸弥教授の iPS 細胞に代表されるように、日本の基礎研究のレベルは高いのに、それが新しい薬や治療法に結びつかないのか。例えば、がんの分子標的薬は米国では約 40 種類承認されているが、その中に日本生まれは 1 つもない。その最大の理由は、「国家戦略が欠如しているため」と中村教授は指摘する。

『近年は新しい薬や医療機器は、大学などでの研究の成果を実用に結びつけ、さらに産業として開花させるという作業を通じて生み出されるものが多くなっている。しかし、日本では、大学の研究は文部科学省、薬の安全性や有効性を確認して承認するのは厚生労働省、産業の育成、支援は経済産業省という縦割りの構図の中で、バラバラに行政支援が進められている。その結果、国益より省益が優先されるという状況がまかり通るようになり、こうした省庁間の深い谷間に阻まれて、せっかくの研究成果が活かされず、創薬などの分野で諸外国に遅れをとるようになった。』

「オールジャパンの意気込みで」より。



民主党の仙谷由人官房長官からの打診があり、こうした状況を早急に改善したいと強く思われ、2011 年 1 月 7 日、内閣官房医療イノベーション推進室長に任命された。記者会見で、「省庁の壁を超えた戦術を練り上げて実行に移す」と決意を表明され、「医薬品の開発、医療機器、再生医療、個別化医療」を四本柱にされた。ノーベル化学賞を受賞された田中耕一フェローを始め、錚々たるメンバーが集まった。しかしすぐに、1 月半ば、問責決議を受けて仙谷官房長官が辞任。だんだん雲行きがあやしくなり、関係各庁の対応が鈍くなった。さらに、3 月 11 日東日本大震災が起き、事態は大きく変わった。震災で医療イノベーションなど後回しという雰囲気となった。もし、政府が本気で大事だと思っているのであれば、震災への対策が重なっても、むしろ震災復興とうまくリンクさせる方策がとられるべきだと考えられ、様々なことを提案された。しかし、11 月末、「医療イノベーション推進室は復興には口出しするな」という役人の一言があり、シカゴ大学へ移られることに決められたのである。その時の先生のお気持ちは。

「がんワクチン治療革命。私は最後まで希望を捨てません」より。

『もう日本にこだわらなくてもいいじゃないか。一刻も早く患者さんたちに「希望」を届けたい。それには、もう一度、研究者の立場にもどって、環境の整ったアメリカで新薬の開発を続行するしかない。文字どおり苦渋の選択だった。』

最後に。中村教授からのメッセージをお伝えする。

『医療という分野の発展は、必ず、世界的に日本の存在感を高め、日本人がその誇りを取り戻すことにつながるはず。日の丸印の医薬品や医療機器が世界に流通し、多くの苦しんでいる患者さん方に、夢や希望を提供し、笑顔を取り戻すことができれば、確実に「日の丸」は、再びその輝きを取り戻すことができるでしょう。その意味でも、政治の役割は重要です。』

永田町と霞が関に存在する深い谷間、これに橋をかけないと…、そんな思いが募りますが、私には橋をかけるだけの力はありません。志の高い政治家や官僚が出現して、この深い谷にいつか橋をかけてくれることを願わずにはられません。』

「おわりにーオーダーメイド医療の夢ー」より。

安倍総理をはじめ、日本を医療先進国にしようとする志のある医療従事者、患者様、為政者、官僚、一人でも多くの日本人に本書を読んでいただきたい。そして、日本を再度医療先進国に戻しませんか。これが、今の私の気持ちです。

理事 井上 林太郎